

太宰治『新ハムレット』とシェイクスピア『ハムレット』

91E001 阿部則子

『新ハムレット』を読むと、シェイクスピアの『ハムレット』という太い旋律が低音部を流れているように感じる。それは、太宰自身が述べているように、彼がシェイクスピアに「天才の巨腕を感じ」ているせいだろう。しかし、やはり『新ハムレット』は「人物の名前と、だいたい環境だけを、沙翁の『ハムレット』から拝借し」たにすぎないと言える。なぜなら、この二つの作品にはかなりの相違が認められるからである。

『ハムレット』では、まず亡霊が登場して真相を語り、王子は復讐を誓うと、それから巧妙な手段を工作し、ついには目的を達成する。つまり、当時流行していた復讐悲劇である。これに対して、『新ハムレット』では、王子は物語の最終部で、叔父が父を殺害したことを知るわけで、明らかに復讐が主題ではない。それでは、『新ハムレット』の主題は何であろうか。作者は、はしがきで「(この作品は)作者の勝手な、創造の遊戯に過ぎない…学問的、または政治的な意味は、みじんもない。狭い、心理の実験である。」と言っている。確かに、主題を導くことは難しい。奥野健男氏は、国をあげて太平洋戦争に向かおうとしていた当時、一切の反戦思想が禁じられていたにもかかわらず、幕切れの「国の名誉、という最高の旗じるし一つのために戦え」という王の命令に対し、「信じられない。僕の疑惑は、僕が死ぬまで持ちつづける」というハムレットの台詞は、太宰の反戦思想の反映で、これは反戦的作品である、としている。作者は、『新ハムレット』を戯曲としてではなく、LESEDRAMA ふうの小説のつもりで書いたと述べているが、この作品は何度となく舞台上で上演されており、小説のジャンルに加えることには甚だ疑問を感じるが、作者に従えば、『ハムレット』と『新ハムレット』の間には、戯曲と小説という違いも出てくる。ここにおいて、プロット、主題、構成、ジャンルに違いがあると言うことができる。

更に詳しく共通点と相違点を見てみよう。両作品に共通していることは、デンマークという舞台設定、「高位な人物が異常な災厄に襲われ、死に至る」という意味で悲劇的であること、登場人物とそれぞれの職務などである。但し、先王の亡霊と劇団の役者達は『新ハムレット』には登場しない。『新ハムレット』では事の真相を亡霊からではなく、ホレーショーから噂話として聞くのであり、劇中劇は、ハムレットとポローニアスとホレーショーの三人が朗読劇を、それもポローニアスの提唱によって演じるのである。この他にも多くの相違点を見出すことができる。例えば、『新ハムレット』では、レヤチーズはハムレットとの決闘で命を落とすのではなく、戦争の犠牲となっている。ハムレットは錯乱気味ではあるが、狂人を装いはしない。また、シェイクスピアのハムレットのように初めから叔父の先王殺害を疑ってはおらず、噂話を聞くまでは全くそれに気づいていない。しかも叔父を嫌ってもいない。ハムレットの憂うつな理由を聞き出す役目を課せられているのは、ローゼンクランツとギルデンスターンではなく、ホレーショーである。オフィーリアに関しては、彼女は『新ハムレット』では妊娠しており、父が殺されたことを知らないで気が狂うこともない。川で死ぬのはオフィーリアではなく王

妃の方である。オフェーリアは王妃を大変慕っていたが、これも『ハムレット』には書かれていない。ポローニアスに関しては、徹頭徹尾王の味方であるわけではないし、ハムレットではなく、王に刺される。また、彼のレヤチーズ遊学に際しての事細かな訓話には、太宰の学生時代の苦い体験が反映されている。

そして、戯曲でなければ当然のことであるが、『新ハムレット』には独白が無い。会話が語り口調であるのはそのためであろうか。つまり、心の内を会話の中で表現しようとするれば、おのずとことばが長くなる。気持ちを口に出しているため、我々読者には、語り手が正直で、素直であるように感じられる。目上の人に対して無遠慮であるように感じるのもそのせいであろう。これは、ポローニアスから王へ、オフェーリアから妃へ、ホレーショーからハムレットへ、オフェーリアからハムレットへのことばを通して感じられる。

スフィンクスが英語を話したら、シェイクスピアのハムレットのように話すだろうと言われるが、日本語を話したら、太宰のハムレットのように話すとは思えない。なぜなら、太宰のハムレットは詭弁家で、やや饒舌すぎるからである。ハムレットに限らず、登場人物の饒舌さが『新ハムレット』を滑稽な作品にしている大きな要因である。結局、滑稽味にあふれたこの作品は、沙翁の『ハムレット』の完璧なパロディーなのである。